

## 技術の伝承と発展

水化学部会長 渡邊 豊（東北大学）

私は三重県の生まれで、父方の出自は伊勢市近隣の農家です。伊勢神宮（じつは、修飾辞の付かない「神宮」が正式名称です）にほど近い村です。

神宮では、20年に一度、内宮（皇大神宮）および外宮（豊受大神宮）の2つの正宮の正殿と14の別宮の全ての社殿を、各々すぐ隣の敷地に造り替えて神座を遷します。このとき、御装束神宝もすべて新しくします。この事業は式年遷宮と呼ばれ、持統天皇4年（690）に第1回の遷宮が行われて以来、約1300年にわたって延々と繰り返されてきています。式年遷宮の理由についてはいずれの書籍にも記載がなく、様々に推論されてきたようです。私は浅学にして宗教的意味や文化的意味を存じませんが、工学の立場から見ると、確実に技術を伝承するための手段だったのではないかと思われまます。宮大工は、生涯に三度、式年遷宮に関わります。最初は見習い、二度目は棟梁、三度目は後見としてです。自分の手で作ること、自分の頭で考えること、他人に教えること、によって初めて確実に技術が伝承されると考えたのでしょうか。そう考えると、20年という間隔も絶妙です。この事業を飛鳥時代に開始した人たち、そして現在まで延々と受け継いできた日本人は大したものですよ。単なる伝承に留まるのではなく、時代々に工夫や洗練が積み重ねられてきたであろうとも思います。

翻って、原子力技術はどうでしょうか。現代の産業技術の中でも、社会や国力の根幹となる技術については、式年遷宮的な仕組みが国家として必要ではないか、と思います。技術を伝承・発展させていくことに時々の経済合理性や政治的な都合を超えた価値がある、そのような技術分野もあると考えます。エネルギー安全保障を支える原子力エネルギー技術はその一つです。